

FOUR ELEPHANTS IN A P&G CAR

Ferdinando Frega - Nando the Scribe



P&Gの車に象4頭

gillettenarrativeの公開から、ちょうど1年が過ぎていた。

そのとき、電話が鳴った。

番号に疑いの余地はなかった。国番号はプラス1。合衆国。実家の誰かが、私のことを知りたがっている。

「もしもし。おはようございます。フレーガさんでいらっしゃいますか」

「ええ、どうぞ」

「アンナと申します。シンシナティのP&Gの者です」

「どちらの？」

そして私は答える。いいですか、うちの息子はまず結婚しなきゃならない、それから子どもをつくって、そのあとで私が卸の得意先に注文を出します。Pampersの女の子用を頼むつもりでね — そうすれば間違いなく女の子が生まれる。会社から直接は買いません — そんな力はないもので。陳列台を置く棚もない。

彼女は笑い出す。私のような相手は予想していなかったのがわかる。

それから手短に、自分はCEOの秘書だと言う。少しお話しする時間はあるか、どうやってCEOにおつなぎすればよいか、と。

だが相手はインド人だ。インドの。私の記憶が正しければ、3つの言語を話す。

「つないでください。何の用か、聞いてみましょう」

「もしもし。おはよう、フレーガ。Jです。お元気ですか」

「元気です、社長。そちらはいかがですか」

「元気ですよ、ありがとう。こちらも同じです」

「それで、社長。私に何かご用でしょうか」

「ただ、いまは70ドルしか持っていません。融資がご入り用なら — その範囲でお願いします」

彼は微笑む。そして私を安心させる。その手のことは起こらない。少なくとも、いまのところは。

「聞いてください、フレーガ。あなたは1年あまり前にサイトをつくった — gillettenarrativeです — そこでナラティブの製品や音声、トレーラーを無償で配っている。私に捧げてくれたものは読みました。ところが同僚たちの報告では、読んでいるのは私たち3人だけではない。もっとずっと多い」

「すでに10億を超えました。しかも、まだ始まったばかりです。そのうえあなたは、道すがら、ウェブ上の私たちのGilletteの検索クエリをすべて押さえてしまった。もし私たちが新製品を市場に出したいと思えば、あなたのサイトにバナーを入れてくれと頼まなければならない」

「さて、どうしましょうか、フレーガ」

「社長。まずやるべきことは — 昔の百姓が言っていたように — 女の子が生まれるようにすることです。そうすれば、消費者が増えることは保証される。利益も上がる。配当も」

「あとのことは、それから考えましょう。バナーについては — 問題ありません。無料でやります。母親から金を取りませんよ」

「私のことはご心配なく。私は母なるGilletteの気性で生きています。あの人は決して手を放さない」

「考えていたのですが」と社長は言う。「あなたを訪ねていこうかと。署名入りの1ドル紙幣を持っていきます。あなたのご親切にも全世界に知らせてくれた、あれです。それから、あのモルタデッラのサンドイッチを食べる。あなたのせいで、食べたくてたまらなくなった — 一度も味わったことがないのに」

「あれは馬肉です、社長。あなたの宗教で差し支えなければ — 結構なことです。そうでなければ、'ndujaにしましょう。カラブリアの辛い唐辛子のペーストです」

「さて。あの飛行機に乗る前に — インドのなぞなぞをひとつ差し上げます」

「ある街から別の街へ運ばなければならない象が4頭います。それを小さな車に乗せなければならない — P&Gのエコノミー車です、節約しないといけませんから。どこに乗せますか」

「ふむ。フレーガ。前の座席に2頭。うしろに2頭」

「ありがとうございます、社長。
あの便にお乗りになって結構です」

「お迎えできるのを楽しみにしています」

フェルディナンド